『旅寐して』の句は、旅に出てゐて、珍らしく師走の大掃除、お正月を迎へる煤拂を見た、と云つたのです。芭蕉が草庵にゐて歳旦を迎へるならば、草庵だけ簡單に煤拂するだけで、他所の煤拂などを見ないからである。何となれば、歳旦を迎へようが迎へまいが、所謂煤拂らしい煤拂ひを見て來なかつたのです。ところが旅に出てゐるため、世間のせはしい煤拂を見て、あゝもう直ぐ歳旦が來るのである、と感じたのであります。

『人に家』の句は、乙州の新宅に入つて、悠々樂しく年をおくる、自分の氣安さを詠んだものであります。呑氣といへば呑氣、仕合せといへば仕合せといへる芭蕉でありますが、かうしたときに於てもすまない、有難い、といふ氣持を多分に持つてゐたから、句が生れたものと見なければなりません。

『一里一錢』は、江戸の花見をするには、先づ錢であるといふ、都住ひの面倒、自然と人間生活との不調和を述べたものであります。この半面錢といふものゝ調法であることを、泌々と感じてゐるやうであります。錢といへば、もう一つ次のやうな句もありました。

一文の酢の錢落す鵜川かな

思ひ出せば一茶にもこれに似た句がありました。

暑き日や青草見るも錢次第

門へ打水も錢なり江戸住居

二三文錢も景色や花見堂

俳人は貧乏根性ですか、それともひねくれてゐるせいか、又金錢に直接關係を持たないせいか、かうしたところに嫌に頭を使つてゐますね」

客「それはさうでせう。深山幽谷だつたら、更に美しい花を只で眺めることが出來るのに、錢を出して花を見るのだから、一寸嫌な感じを持つことになります。錢が惜しいといふ氣持は、それほど多くなくても」

主人「若し錢が惜しい、錢を貯へたいなどと思ふ俳人があつたら、それは全く矛盾してゐることになります。俳人は錢を獲得するのではなくて、貰つて生活するのが普通だつたからです。こんな問題をこゝで論じてゆくと、果しがつかなくなりますから、これには觸れないことにしませう」

客「一茶の句を云はれましたが、一茶は社會を呪つてゐたといひますか、階級打破的な心を非常に強く抱いてゐたやうに見られますね。例へば

大方の祿盗人や冬ごもり

百兩の松をけなして納豆汁

こちとらは花が咲かうが咲くまいが

のやうに。そんな氣持が芭蕉にはなかつたでせうか」

主人「ちつとも無かつたと云つて差支ないと思ひます。それは多分に時代といふ背景にもよることですが、芭蕉は先に申上げたやうに、宗教的に修練を經てゐますから、更に俳諧に沒入してゐましたから、さうした不滿を洩らす餘裕がなかつた、と見てよいでせう。一概に世故に長けてゐた人であつたから、と言ひ捨てゝしまふことも出來ないでせう」

客「痒いところに手の屆くやう、詳しく說明を承りまして、よく了解出來ました」

主人「大分前回の話と重複したところもあり、又今日の話の中でも、重複したところがあつたかと思ひます。この邊は話の勢ひで橫道に外れたものとして、御寬容を願ふといたしませう」

芭蕉の洒落

客「芭蕉の性格解剖も愈〻面白くなつてきました。これまでは大分四解張つた方面のことに就いて、伺つてきたやうであります。今度はくだけた方面といひませうか、さう堅苦しくない方面のことを伺

ひたいと思ひます」

主人「それも宜しいでせう。併し面白半分に私を苦しめるやうなことのないやう、穩かに願ひたいものです」

客「そんな意地惡な考へから、お伺ひしようとするのではありません。では芭蕉の洒落な性格方面に關して、高說を伺ひたいのであります。芭蕉も年がら年中堅苦しい生活をしてゐたわけではないやうですから、たまには人の頤を解くやうなこともありましたでせう」

主人「大いにある、と申さなければなりません。芭蕉は禮儀を正しく守つてゐますが、わざとらしい態度や、自ら行儀正しく見せるといふやうなことは、絕對にないといつてもよいくらゐです。どちらかといへば、自然に委せて行きたいものだ、といふ希望がありはしなかつたでせうか。有名な話ですが、こんなことがあります。『猿簑』の撰のときに、宗次といふ俳人が、もう一句の入集を願つて數句を吟じてみたが取られるやうな句が無かつたのです。或晩宗次は畏つて、芭蕉の側にきちんと坐つてゐたのです。そこで芭蕉は、さあ、くつろいではどうです、わしも橫になりませう、と云ひました。それでは御免下さい、じだらくにしてゐると、一入凉しう御座いますなア、と宗次が云ひましたところ、芭蕉は、それ、そのことがすなはち發句ですよ、と云ひました。このとき作つた宗次の句は

じだらくに居れば涼しき夕かな

ですが、これを芭蕉は早速に『猿簑』の撰に入れたのです。こんなことはほんの一例に過ぎませんが、芭蕉は窮屈なことが大嫌ひのやうです」

客「それでは相當洒落なところも見られるのですから、奇行や珍聞なども拾ひ出されるといふわけでせうか。これは又面白いことですから、一つ二つ聞かせて下さい」

主人「許六の『宇陀法師』といふ本に、

例の鼻をくんくんと吹き鳴らして喜ばれたり

とあります。なかなか洒落氣があるではありませんか。又痔が悪くて、長雪隱の芭蕉は、こんな愛嬌を振りまいて居ります。

翁ある御方にて會半ばに席を立て、長雪隱をせられけるを、幾度も召出けるに、やゝへて手洗ひ口そゝぎて、笑ふて曰く、人間五十年といへり、我二十五年をば後架にながらへたるなり。

と、咄嗟に滑稽な言葉を弄してゐるではありませんか。眞面目一點張りな人なら、どうしてこんな輕い洒落を飛ばすことが出來ますか。尙ほ猪兵衛に宛てた書簡に

此方京大阪貧乏弟子もかけあつまり、日々宿を喰つぶし、大笑ひ致しくらし申候

などと、あつさり生計の狀態を知らせてゐます。それからこれに類した話は俳句にも隨分多いやうです。何となれば俳句には、遂不知不識に自分の心が、それも正直に反映するからでありませう。文章ですと、餘り變なものを書けないといふ場合もあり、又可笑しなことでも、人に話の出來ないことなどもありますから、從つて遺らないといふことになるのでせう」

客「それはよくわかります。句を作るときに、謹嚴な句を作らうと心構へても、なかなかさうは行きませんですね。矢張りその人の性格の一部分が、或ひは着想に、或ひは形式に現れてくるのが自然でありませう。私の句作などにしても、どうもそんな風になつてしまひます。そこで芭蕉の性格の一面しかも正しい一面を觀察するには、俳句を基本にしてお話願ふのが、最も適切な方法ではないでせうか」

主人「といふやうなことにして、洒落な俳句を拾ひ出し、例の駄言をならべてみませうか。

誰やらが姿に似たりけさの春

嵐雪から正月小袖を貰ひ、それを身に着けたときの感想であります。この誰やらが問題ですが、馬鹿に立派な春着を着たのだから、どうも自分のやうには思はれない、誰れか他の人のやうな感じがしてならない、といふところであります。まあ、好意を感謝しつゝ、自分の姿に打興じた句と見てよいで

せう。

天鉾や京江戸かけて千代の春

京江戸をかけて、芽出度い千代の春であるといふことゝ、天鉾に京の春と江戸の春とをかけて計る、といふことに懸けてある句と見なければなりますまい。あまり眞面目な句でもなく、感心した句でもありません。要するに狙ひどころが、おかしさ、おもしろさ、を衝いたゞけのものです。

歳旦

二日にもぬかりはせじな花の春

郷里伊賀に於て、除夜の酒宴を張り、醉ひに醉うて、遂に元朝を寐過ごしてしまつた、思へばとんでもないしくじりをしたものである、せめて二日の朝には、東天を拜まなければならない。しかしそれも酒宴のはずみでどうなることやら。といはんばかりに、明らさまなる心を吐いてゐます。芭蕉もこんなにはめを外して、飲むことがあつたのかと思はれます。一つ芭蕉の醉つた姿や、唄や踊りに接したいものですね

於春春大なる哉春と云々

奇拔な句でせう。云つてゐるところは、あゝ春である、大きい春である、成程春といふべきである、

といふくらゐのものでせう。たゞ表現に於ての奇調が見られるだけですが、こんな句を作つても得意になつた、といふ芭蕉の氣持を考へるとおもしろいではありませんか。

此梅に牛も初音と鳴つべし

古來梅に鶯が初音ではあるが、今、此梅に牛が吼え出した、さあ、これも初音といふべきであらうか、と述べた句であります。或ひは牛の初音と洒落れたところが、芭蕉の見付けどころかもしれませんが、趣向の平凡さからみて、問題外の低級な句といはざるを得ません。

誰聟ぞ齒朶に餅おふ丑の年

山家迎春の句で、齒朶に餅を負うて行くのは、誰れの聟殿であらうかと興じたのであります。丑の年は聟殿にも懸け、又負う牛にも懸けてあるのでせう。構想を素直な寫實であると見るのは、褒め過ぎた言葉で、芭蕉の作意はどちらかといふと、駄洒落氣分が強かつたものと思はれます。

二月吉日とて是橘が剃髪入醫門を賀す

はつむまに狐のそりし頭哉

其角の奴僕である是橘が、頭を剃つて醫者になつたのを祝うた句であります。句意は、是橘が急に心變つて頭を剃り醫者になつたのは、初午の狐が來て髪を剃り落してくれたのではないか、即ち化され

たのではあるまいか、と滑稽に詠み放つたものでありませう。芭蕉にも、こんな輕い洒落があつたのです。

鶯や餅に糞する椽の先

餅の干してある椽先に、鶯が飛びざまに糞を落したといふのであります。これを滑稽な句と見るのはよろしくないかもしれませんが、それにしても輕妙な句であります。つくろはずに句材にするところに、ほゝゑましさがあるではありませんか。

盃に泥な落しそむら燕

これも大體先の句に似たやうなものであります。燕が澤山群れ翔んでゐる、その下に樂しく酒を汲み交してゐるのでせうか。おい、燕よ、お前のくわへてゐるその泥を、盃の中に落としてはくれるなよ、と醉狂な言葉を投げかけてゐます。

風吹けば尾ほそうなるや犬櫻

犬櫻ですから、枝を尾と見たてたのです。無論そんなところが、この句の中心となつてをり、すなはちおもしろさでもありませう。取材はいふまでもなく、櫻の枝に風が吹いて、枝が細々と搖れてゐるところを、犬櫻ゆゑに犬に扱つたまでのことであります。芭蕉がこんな見方をして悅に入つたのかと

思ふと、ふき出したくもなります。

春風にふき出し笑ふ花も哉

『ふき出し』は『春風が吹き出し』、と『ふき出し笑ふ』の兩方に懸けてあります。內容を申上げると實に平凡なもの、たゞ春風が吹いて來たので、花の蕾も破れ出すといふやうなところです。文字の綾といへば文字の綾ですが、作者なる芭蕉にも、さうした滑稽的な輕い氣持があつたから、こんな作が出來たものでありませう。

盛じや花にそゞろ法師ぬめり妻

花が盛りであるわい、浮かれ法師や浮かれ女が歩いてゐる、といふ光景を叙したものでありませう。ぬめり妻とは、謂はゞ仇な女といふ意味であると思ひます。

てきちよくにもててふ來るや花見酒

ためらひながら、花見酒を持つてくることであるわい、と花見の一景を、極めて卑俗に捉へられてある句と見なければなりません。

初花にいのち七十五年ほど

櫻を、それも初花を眺めたので、命が七十五年生き延びることが出來る、とよろこびを誇張した句で

あります。つまり初物を喰へば長生が出來るといふことを、初花を見ればそれ以上長生が出來ると洒落れたまでの句であります。併しこの句にしても亦前の二句にしても、俳人ぶつた通人ぶつた、若い芭蕉の洒落氣が漂ふてゐるだけのものであります。

艶ナル奴今やう花にらうさいス

らうさいは弄齋節で、小唄の一種であります。伊達な奴が當世流行の花見に、弄齋節を唄つてゐる、といふところでありませう。江戸吉原あたりの、情緒を浮き出させたつもりかもしれません。芭蕉と始めから、『岩に泌み入る』の境地でもなく、又『古池や』の句でもなかつたと知つて置けば、それでよろしいかと思ひます。

初眞桑たてにやわらん輪にやせん

酒田志玉亭納涼の吟で、そのときには、句を作らぬものには眞桑瓜を喰はせないことにしよう、などと云ひ出したものがあつたといふことです。そんなわけですから、芭蕉も幾分戯れ氣分で、うまさうな初眞桑ゆゑ、縦に割つて喰はうか、輪切りにして喰はうか、と興じたのであります。

枯枝に烏のとまりたるや秋の暮

この句は『古池や』の句などとならべて、芭蕉が閑寂の境地に悟入したる、名句であると推賞されて

ゐるやうであります。併しそれは甚だしい間違ひであると思はれます。何となれば原句はこゝに示しました通り、『とまりたるや』であつて、『とまりけり』ではないのです。即ち芭蕉の作意は、駄洒落半分に、わざとらしく『とまりたるや』としたものであります。これが後日『とまりけり』と訂正されて『曠野』に出されたものであります。ともあれ、原作を尊重して、こゝに句作のときの氣分を申上げたのです。

座頭かと人に見られて月見哉

自分が一人ぽつねんと立つて、月見をしてゐるので、その間抜けた姿が、如何にも座頭らしく見られた、と洒落れた句でありませう。そのときは芭蕉も、自分のおかしな恰好に、ふゝんと一人笑ひを洩らしたことであらうと思ひます。

蝶も來て酢を吸ふ菊のすあへ哉

美味さうに出來た菊の酢和に、蝶々までこの匂ひにつられて翔んで來たのか、蝶々が無心になつて菊の酢を舐めてゐることよ、と云つたのであります。

芋洗ふ女西行ならば歌よまむ

西行谷の麓で詠んだ句であります。そこで西行を句材にしたといふわけであります。西行は旅すがら

歌を以て遊女と問答するくらゐに洒落れてゐる。芋を洗つてゐる女達よ、若しこゝに西行が通り合せたならば、直ちに歌を詠むであらうよ、と芭蕉自らもさうした洒落に浸つたのであります。

龍宮もけふの鹽路や土用干

今日は潮が干いたので、あの龍宮もさぞや土用干であらうよ、と滑稽に云ひすてた句でありませう。

この續きものゝやうな句に

白炭やかの浦島が老の箱

があります。これは爐に白炭のあるさまを、浦島太郎が玉手箱を開いて白髪になつたことに、なぞらへたものであります。別に洒落の句ではありませんが、序に紹介したまでのことです。

歩行ならば杖つき坂を落馬哉

馬に乘つて杖突坂を昇つたとき、誤つて落馬した。始めから馬に乘らずに、杖をついて歩いたならばよかつたのに、といつたのであります。この句はすなはち伊勢國内部村の杖突坂から、杖をついて坂を歩くことに懸けてあるのです。着想から見ても、亦叙法から見ても、興味一點張りの句で、芭蕉の洒落があるだけであります。これに似通つた句で、次のやうなものがあります。

花の山袈裟落されな坊主達

これは説明するまでもなく、一讀明瞭な句でありませう。前の句と同じやうな洒落を含んだ句として、お知らせいたします。

もう相當句を擧げたぢやないでせうか。こゝら邊で一休みしたい頃です。次々と句を擧げてゆくと、幾らでもありさうな氣がしますし、それに同じやうなことを繰返して申上げる私も興味が薄らぎ、聞手のあなたも飽きはしませんでせうか」

客「さうですね、大體は見透がつきましたと申しませうか、芭蕉の性格の一側面が手に取るやうに、知ることが出來ました。隅から隅まで伺ふのもよいですが、先生の御疲れを顧みないやうな氣がして恐縮に堪へない次第です。今日は本當にこれで結構であります」

主人「さう云はれると、私こそ恐縮で、嫌でも應でも話を續けて行かねばならないやうです。併し又考へてみると、同じやうな句の解説を續けてゆくといふことになりますから、こゝに句だけを擧げて、その責を塞ぐことゝいたしませう。勿論内容の洒落ばかりでなく、表現に洒落の見られる句も拾ひ出してみます。

東山月の出やうがあゝでない

世わたりや渡りくらべてわたり鳥

見たか何所にそれおゝ見へた角力艸
雀踊れ我もその年過るとも
世にさかる花にも念佛申しけり
猿引は猿の小袖をきぬた哉
荻の聲こや秋風の口うつし
面白き秋の朝寐や亭主ぶり
ゑびす講酢賣に袴着せにけり
春の日にあたまの長き男かな
櫻哉小町が姉の名はしらず
花に舍り瓢先生と自云り
辨慶は夏も紙衣の羽織かな
鶯に片付させんすゞめ畏

先づこんなところでせうか」

客「呆れるほど多いですね。芭蕉とも云はれる人が、と思ふと尙更驚くばかりです」

主人「それでも、私は決して多いとは思つてゐません。俳人としてこのくらゐ機智滑稽を詠むのは、當然のことゝ思ひます。殊に談林の影響をうけた芭蕉ですから、もつともつと突込んだ可笑味があつてよいではないか、とさへ思つてゐるのです」

客「一茶などは大變なものですね。俳諧發句自體が滑稽を目指してゐたのでせうか……」

主人「さうしたことも、幾分云はれないわけではありません。俳諧發句は御承知のやうに、日本國民精神を詠み入れるものでせう。そこで滑稽洒落なんですが、それも我が國民性の一部を成してゐるものでせう。さうすると、俳諧發句に滑稽洒落なんどが、どしどし詠まれるといふことになります。或宗匠などは、俳諧發句といふものは、可笑味・面白味などを詠むものである、とさへ力說したものです。まあ、こんなことは時代に依り人に依つて違ひますが、我が國民性の一部を占めてゐる以上、時時詠まれることは當然であります。芭蕉にしても、偏した、こちこちの道學者ではありませんから、可笑味、面白味、滑稽、洒脫、諧謔などの句が時に應じて作られるといふのは、當然過ぎることであります。但し芭蕉の性格は、うわついた剽輕性が少なかつたから、抱腹絕倒式な句が生れなかつた、といふまでのことです。これに比べて、一茶は親友夏目成美が『滑稽の獨壇』と評してゐるほど、多分に瓢逸、皮肉、諷刺、滑稽、機智に豐富な性格を具へてゐたのであります。從つて一茶の滑稽、駄洒

落の句などは、全く芭蕉と撰を異にし、餘りにかけ離れてゐるのに、啞然としてしまひます」

客「一二句比較してみると、どんなことになりますか」

主人「度々申上げるやうに、ほう、と云つたきり、呆れて口も利けないでせう。例へば

野大根大髭殿に引かれけり

雉子鳴くやてんてん天下泰平と

高うは御座りますれど木から蛙かな

屁ひり虫人になすつたつら付きぞ

おれよりはるか上手ぞ屁ひり虫

こんな句ですが、いやはや何と云ひませうか、これ式の句が幾百となくあります」

客「成程、呆れてものが云ひません。さういはれてみると、人相は爭ひないものです。芭蕉は飄々乎として雲水のやうな顔をしてゐますが、それに對して一茶は、ちよこなんと坐り、今にも吹き出しさうな顔をしてゐるではありませんか」

主人「それはあなたの見方かもしれませんが、正しい見方とは申されないでせう。芭蕉が凛たる姿であるとは、一面の觀察でありまして、總てを盡した言葉とはうけとれません。大體痔持ですから、神

經質な苦ら顔をすることも、しばしばありましたでせうが、常にさうした氣持を抑へて、出來るだけ柔和であるやう、慈顔を見せてゐたやうであります。芭蕉自身が鑿を入れたといふ木像を見ましても、實に穩やかな顔相をしてをります。これと反對に一茶は、自作の漫畫卽ち自我像は剽輕に畫きなぐつてをりますが、さうでない普段の顔になりますと、實にとげとげしい頑固親爺といつた相を示してをります。先づ顔相のことはこのくらゐにして、次には俳句でありますが、顔相と俳句とは必ずしも一致するものではないと思ふのです。例へば眞面目な人は口に出しては容易に冗談も云ひ得ませんが、そのはけ口といひますか、句や文章にはよく冗談めたこと、輕い洒落などを含んだものを書いてゐます。一見、顔に似ないものゆゑ、その意外なことに驚きもしますが、その實それが自然ではないかと思はれます。といふのは、口に出して言はないことを、句に又は文章にものして、始めて滿たされるわけのものであります。そこで謹嚴そのものに見られるやうな芭蕉に、案外洒落な句が幾つも見出されるといふわけでもあります。それと同じやうに、頑固親爺そつくりな、羽織袴の一茶に、夥しい滑稽駄洒落の句が見出されるといふことになります。こんなことも或一面からの觀察ではないかと思ふのですが、あなたはどう御考へになりますか」

客「今仰言るやうな論法は、全部が全部に當嵌るわけではないと思ひますが、事實さうした例に度々

ぶつかります。いふまでもなく、一面の眞を掴むだ論じ方であると考へられます」

主人「題して芭蕉の洒落といふことではありますが、あつちへこつちへと横道に外れ、とんでもない方向に走つてしまひました。一茶も引合ひに出されたりして、いゝ迷惑でありませう。こゝらあたりでみこしを上げるのが、潮時ではありませんか」

客「實をいひますと、蕉村の性格などとも比較していたゞいたら、層一層明瞭に芭蕉がわかるではないかと思ひ、そのうちに蕉村を引合ひに出されるのではあるまいか、などとも期待してゐました。併しそんな欲を申してゐますと、際限のないことでもあり、この短かい夜も明けてしまひますから。こんなことは申上げる筈ではなかつたのですが、遂遠慮なしに申上げてしまひました」

主人「大いに結構です。忌憚のないところを云つて貰はねば困るぢやありませんか。この次からは、さうした方面にも氣を配つて、出來るだけ比較檢討することにいたしませう」

芭蕉の膽力

客「少し無理なお願ひでせうが、芭蕉は膽力が坐つてゐたかどうか、それに就て何か面白い話でもあ

りましたら、聞かせていたゞきたいのであります」

主人「これは又物凄い質問ですね。聞く方はまことに面白いに違ひありませんが、まあ何といつておしやべりする材料が乏しい、と申上げるより他ありません」

客「それは私も承知の上でありますが、今日まで御調になつた中から、一つ二つでも、さうした方面の話があつたら、聞きたいものです」

主人「つまりさうなりますと、逸話めいたことになりますが、それでよければ二つ三つ御披露しませうか」

客「それで結構でありますが、先づ最初におほざつぱなところ、芭蕉は膽力が坐つてゐたかどうか、どんな風だつたでせうか、それから伺ひます」

主人「さうした方面に興味を持たれるあなたは、どうな風にお考へですか」

客「それがわからないのです。今日まで聞きたい、讀みたい、と思つて來たのであります。從つて申上げる程の智識もなく、謂はゞ白紙といふところで御座います」

主人「それは謙遜といひませうか、卑怯といひませうか、そんなことはない筈です。今日迄あなたが芭蕉に關する本を讀んだところから、又俳句を味つたところから推しても、其處には何かしらあなた

の見方といふものが出來てゐる筈です」

客「さう仰言るならば申上げます。甚だ平凡な考へでせうが、芭蕉は病弱であり、且つ多感な人でしたから、非常に憶病だつたらうと思つてをります」

主人「成程、一般にはさう考へられ易いでせう。又さう考へられるのが無理もないことです。併し事實は、案外さうでなかつたと見られるところがあります」

客「といひますと、生れながらにして、膽力が坐つてゐたことになりますか」

主人「一概にさうとは云はれません。又その點は餘りはつきり致しませんがね」

客「それでは他に原因らしい原因がありますか」

主人「さう短刀直入で來られても困ります。私はこんな風に考へてゐますが、果してどんなものですかな。御承知のやうに交通が不便で、危險の多いあの當時に、自然を無二の友として、到る處に行脚をして歩いたのですから、自然の偉靈なる氣に養はれたといひますか、吾々の想像を許さぬ程、度胸のある人となつて來たのではありますまいか。それから猶僧侶の生活や心境を希求しつゝ、身を風雲に委せてゐたゝめに、われ知るとなく、大膽な精神を養ふことが出來たものであるとも思はれます」

客「さう云はれますと、成程さうであつたか、と今更のやうに首肯出來ます。時代劇の映畫ぢやありませんが、山賊・强盗・追剝などと、さういつたものがしきりと出沒してゐたでせうから、今日のやうな生やさしい旅ではなかつたでせう。一口に句を作つて遊び歩くといつても、半分は命懸けのやうなわけですね。さうすると餘程度胸がなければ、句行脚は決行出來ないといふことになります。若しも度胸のない俳人だつたら、嫌應なしに度胸が坐るといふことにもなりますね」

主人「その通りでせう、と私は考へてゐるのです。山賊といへば、芭蕉に面白い話があります。それを申上げてみませう。

或日芭蕉は、彦根の森川許六を尋ねようとして、彦根附近の野中を通りました。その時背の丈六尺ばかりの、大兵肥滿の男があらはれて、芭蕉を追かけたのです。芭蕉は直ぐさまこのことを知りましたが、知らないやうな振りをして、泰然自若、悠々迫まらざる態度をとつて歩きつゞけました。その怪しい男は何を仕出かすでせうか、俄かに芭蕉に迫るや、芭蕉の被てゐた着物を奪はうとしたのです。この時芭蕉は後ろを振り向き、少しも恐るゝ色を見せず、布子を一つ脱いで、直ちに大男に與へたのです。それからは勿論夢中に彦根の許六亭に入つたわけですが、これから先きが面白いですよ。

二三日經つてからのことです。見知らぬ少年が許六亭を訪れ、芭蕉が追剝に與へた布子を持つて來たのです。芭蕉も止むないといふやうな顏をして布子を受取り、一座の人に向つて、笑ひながらに盗

難のことを語つたのです。そこでこれを聞いてゐた少年は、皆の衆にこんなことを云ひました。『その山賊といふのは、大神五郎といふ名高い惡徒であります、先達て野原で芭蕉翁を追ひかけたとき、たゞ一と討ちにしてくれようと思つたけれども、どうしたことか、氣おくれがして、とうとう打殺すことが出來なかつた、どうも不思議だと思つてゐたところ、其の人は只今許六亭に居られる芭蕉翁であることを知つて、非常に恐ろしくなつたといふのです、そこでお前が布子を持つて行き、そしてよくお詫びをしてくれと賴まれたのであります』と。何と度胸があるではありませんか。本當かどうかは知る由もありませんが、多分にれに似たやうなことがあつた、と見て差支ないでせうよ」

客「大變に面白い話です。眞僞は別としましても、芭蕉を見る上に何か役に立つところがありますから、もつと話がありますならば敎へて下さい」

主人「それでは逸話か傳說か何か知りませんが、こんな話がありますから、申上げませう。

或年の春、芭蕉は京都から播磨を越え、備中を過ぎて備前にかゝり、岡山に知合ひの俳人を訪ふため、森山の麓に出ました。こゝは東は遙かの谷、西は幾丈とも知れぬ高山であります。未だ明るい時分ですから、芭蕉は平氣でこの山道を歩いてゐます。そのときです、ちつとも風の無いのに、芭蕉の冠つてゐた頭巾が、吹かれるともなく谷へ落ちました。併し恰度木が多かつたので、頭巾は三丈許り

下の木の枝にひつかゝりました。芭蕉は常日頃冠つてゐる頭巾ですから、捨てゝしまふには惜しく、どうしても取らうとし、谷を下つて行きました。それでも頭巾は木の枝にあるため、容易に取れません。こゝで一と工夫をしまして、古木を折つて杖に次ぎ足し、それで頭巾を引き下ろさうとしましたけれどもしつかりと引つかゝつてゐますので、どうしても取れません。今度はやけに木の枝を叩きました。その響きは靜かな山にこだまして、ううんうううんと聞えます。かやうにして、やつとこさと取ることが出來ました。芭蕉はほつと安神して腰を下ろし、山を眺めました。すると山の茂みの間から、三尺ほどの首を出した動物が目に入りました。その顏の赤いこと朱のやうで、眼玉は眞丸で血のやうに赤いのです。しかも口は耳まで裂けてゐて、身體は眞黑です。一體何ものかわかりませんが、動き出したところを見ると、背の丈は七尺以上もありさうです。一見猿のやうでありますが、とにかく惡獸に違ひないと思ひ、芭蕉はこの場を去らなければならぬと決心しました。途端に獸は森を飛び出し、芭蕉を目擊して追かけました。芭蕉は頭巾を片手に、一目散に山を登りました。ところがどうしたはずみか、獸は木の根につまづいて、谷へ落入りました。芭蕉は諸天善神が自分を救つてくれたものと、大喜びで山道を走り、岡山迄六里の道を急ぎました。その間芭蕉は、若しやあの獸が追かけて來はせぬかと、幾度も振返つてみましたが、遂に見えませんでした。かくて日暮には岡山に眞田玄

蕃、卽ち荊中を訪ふことが出來ました。荊中の喜びは一方ならず、忽ち俳友を集めて、芭蕉のために酒宴を張りました。漸く宴もたけなはとなり、芭蕉は乞はるゝまゝに、行脚中の出來事を語りました。そのうちでも、遂先刻遭難した惡獸の話になつたところ、荊中ははたと膝を叩き、それは猿が二千年を經て通力を得たもの、所謂猴々でありまして、先年京都より岡山へ歸る時、私も同じ森山にて遭難し、あやふく一命を取られるところでしたと云ひ、芭蕉の無事であつたことを、非常に喜びました。

先づ大體こんな話です。この時芭蕉は色を失はず、運命とあきらめて、膽力を据ゑてゐたかどうか將又喫驚仰天色を變へて、一目散に逃げ走つたのか。そのへんのことは、芭蕉でない他の人々が容易に窺ひ得ません。只かうした遭難、或ひはこれほどまでゝない遭難に、度々遭つたであらうことは、容易に想像されませう。從つて自然膽力も坐はらざるを得なくなる、といふことが云へるでせう」

客「それは確かにさうです。若し今の御話が事實でないとしても、それに類したことはあり得るものとして、芭蕉の度胸が、年中市井にくすぶつてゐる人々とは、類を異にしてゐるもの、と推察出來ます。これはこれとして、もつと別な話が御座いますか」

主人「もう一つお話いたしませう。これは前の話の續きといひませうか、芭蕉が岡山の荊中宅を辭し

て、備後伯耆へ向ふときであります。備前より備後への街道に左程大きくない川で、阿川といふのがあります。芭蕉はこの渡舟場へ來ましたが、朝が餘りに早かつたゝめ、渡舟場には船頭は勿論、客一人だに居りません。そこで芭蕉は一と休みしようとして、近くの茶見世へ入りました。さうかうしてゐるうちに、船頭らしい連中が十四五人この店へ入り、酒を所望しました。何しろ大勢ですから、酒代は忽ちかさみ、三百文が不足といふことになりました。店の亭主は、前々から酒代の貸しのあるところへ、早朝から又もや三百文を貸しになるとは、今日の商賣も不吉なことである。從つて是非支拂つて貰はねばならぬと催足します。止むを得なければ、今後渡し場で取る客の舟賃を、此方へ引取ることにしようと强硬に催足しました。併し一錢もないのですから、出さうにも出されません。このことを船頭等の頭へ屆けられては、大變なことになります。困つたことだと言ひ合つてゐましたが、その中の一人が、他の連中と何か話をしてゐてかと思ふと、芭蕉の側へ寄り、横柄に立ちはだかり、我我は船頭であるが、思はず酒を過ごし三百文不足してしまつた。依つて御無心ではあるが、三百文あつたら貸してくれぬか、と芭蕉に云ひかけました。芭蕉は知らぬ連中に、三百文をくれるのも馬鹿馬鹿しいと思ひ、自分は諸國修行の身で、貧乏であるから、路錢などにも不自由をしてゐる、よんどころない御無心ではあるが、無いものは仕方のないことですから御斷り申上げます、と言ひました。す

ると船頭は、諸國を修行する者が貯のないといふ法はない、殊に着物を見ても卑しき人間とは見えない、どうしても三百文斗りがないといふなら、我々も男、借りずに取つてやる、といきまき、熊の様な腕を芭蕉の懐へ入れようとしました。芭蕉は驚き、『さうあわてゝはいかん』といひつゝ手をふり放さうとしました。そのとき他の大勢も腕をまくり、芭蕉に取りかゝらうとします。亭主はこれを見て一大事とばかりに驚き、三百文にて旅人に迷惑をかけるとは氣の毒であるから、三百文の貸しは明日迄待つ、といふことにして、漸くこの場を鎭めました。そして亭主はおもむろに、芭蕉に向つてこんなことをいひました。あの船頭等は、あなたから三百文を借りることが出來なかつたのを、遺恨に思つて、渡し場で何かいふかもしれないから、注意しなさい、と。

やがて芭蕉は渡し場へ行つて、船に乘りました。船が二三間川中へ出たころです、案にたがはず、後から來た船に、全部の人を移し、芭蕉一人に船頭一人となり、直ぐさま芭蕉の襟元を捉へ、先刻はよくも恥をかゝせた、そのお禮である、といふや否や、懐中の品を强奪しようとしました。芭蕉は船頭の手を抑へ、こんな貧乏人を相手にしたところで、仕様がないぢやないか、もつと大きな金儲けを敎へてやらう、と笑ひながらに云ひました。それはかうです。

今日の晝頃岡山家の侍と僞つて、京都四條の芝居の役者二人が備前へ行くため、この渡場へ來ま

す。この役者は懐中に五百兩を持つてゐます。何故ならば岡山からこの先迄私と同道したので、よく知つてゐるわけです。あなた方船頭さんは、どうぞその人達を待受けて、兩人丈けを船に乘せ、兩人を打殺して川へ捨てたら、誰一人知るものもありません。即ち手を濡らさずに幸福の身となれませう。實際ならばこれを敎へた私も、二三十兩は御禮に貰つてもよい譯ですが、先程三百文の用立を爲なかつた代りに、この御禮さへ頂かぬことにいたします。さあさあ、追つけ後から參りませう。何分にも巧みにやつてのけなさい。その役者はこれこれかういふ色の衣類を纏つてゐますよ、と詳しく敎へたから堪りません。さうでなくてさへ强慾な船頭ですから、これを本當の事と思ひ込み、芭蕉の襟元から手を離し、いやはや大變な御禮の言葉です。船頭のいふには、自分も好きでこんな商賣をしてゐるのではなく、金がないばかりに船頭をしてゐる仕末、今度は幸福な身となれるから、船頭を止めよう、そしてあなたには、充分に御禮を致します。さあ早く、といつて芭蕉を向ひ岸に渡し、自分は元の渡し場へ戻りました。芭蕉はうまく難を逃れた、船頭をうまく欺いてやつた、とほくそゑみながら其場を立ち去りました。

やがて待つほどに、芭蕉の敎へた通り侍恰好の二人が參り、横柄に船頭を呼びました。船頭は待つてゐましたとばかりに、船に乘せて棹をさし、川の中程に來ました。それから計畫通りに棹を打捨て

て侍兩人の前に寄り、胸ぐらをぐつとおさへて、こら、似せ侍、貴樣らが京都の役者であることは百も承知だ。懷中の五百兩を直ちに渡せと、懷中に手を入れようとしました。

何事ぞと侍は怒り、汝は不屈千萬なる者、我等を誰と心得る、我等は岡山の家中にて其の名を知られたる相澤又七、米澤民部と云ふものである。それにも拘らず役者などと稱し、又金子五百兩を奪ひ取らうとする、其分には捨てゝ置かれぬ、言語同斷の盜賊め、武士の手並を見せてやらう、と船頭の兩手を取りて打倒し、兩人の刀の下げをつなぎ合せて船頭を縛り、船の後ろに立つて、この船の船頭は我々に不屈の事をしたから、こんな目に遭はせてやつたのである、だからそつちの船頭さん、この船を向ふ岸へ付けてくれ、と高らかに叫びました。其後侍兩人は渡船頭を呼付け、委細を語つて聞かせましたところ、渡船頭は恐縮に堪へず、種々と謝罪し、果ては近所の町人を賴み、渡し場の頭共が連印を以て、漸く船頭を貰ひ受け、船頭は無法者故に、追放といふ事になつたのであります。

これは芭蕉が岡山より渡し場の手前迄、一緒に來た侍を知つてゐたところから、わざと役者などといつてだまし、無法な船頭に仇を報いたわけであります。やがて芭蕉は備後のみふきといふところに來て、春の長閑なる野邊を打眺め、强力强慾の船頭を蕗の薹に、自分を梅に譬へて

投入や梅の相手にふきのとう

と一句を吟じたといふことであります。大體こんなやうな話なんですが、芭蕉は後日門人にこの物語りを聞かせた、といふことになつてゐます。今申上げたことは、勿論話しよいやうに、又面白いやうに、私が勝手に多少の修正や加筆もしましたから、どうぞその積りでゐて下さい。この物語は本當とも嘘とも云はれませんが、先づ僞作の部類に屬しませうかね」

客「史實は史實家に委せることにしますが、何て面白い話でせうね、さながら芭蕉の劇を聞いてゐるやうであります。時に俳句にはどんなものがありませうか」

主人「度胸とか膽力などに關係のある俳句は、なかなか見つけ出せないでせう。或ひは度胸のある場合でも、句になるとさうでなくなることもありませうし、又何ともない句でも、案外膽力が坐つてゐるやうに見られることもありませう。無駄ぢやないかもしれませんが、こんな句を拾ひ出すだけ、骨折損のやうな氣がしてなりません。たゞ物凄いやうなところを狙つた俳句として、幾らかこゝにならべてみませうか。

狼も一夜はやどせ萩がもと

若草や狼かよふ道ながら

猿はしに宿りし時

棧や殘暑に夜着を着て寐ける
狼の人に喰はるゝさむさかな

みちのくの名所の内、猫山

山は猫眠りはいてや雪のひま

芭蕉はかうした方面の句は、實に尠いのであります。蕉村や一茶などに較べてみると、全く問題になりません。つまり芭蕉その人の性格にもよりますが、文藝上の趣味に於て、さうしたものを歡迎してゐない時勢であつた、とも見られるわけでせう」

芭蕉と妖怪

客「又變つた質問だと云はれるかもしれませんが、今日は芭蕉と妖怪といふやうな問題に就いて、何か面白い話でも聞かせていたゞき度いのです」

主人「さうですか、今夜も先夜と同じく、面白さうな問題ですね。併し聞き甲斐のあるやうな材料があるかとうかゞ疑問です」

客「慾を云ひません。何でも構はず手當りに次第に、お話を願ひます」

主人「大體が芭蕉の時代に、即ち天和・貞享・元祿の頃には、どちらかといふと妖怪趣味といふやうなものが、それほど歡迎もされてゐなかつたらしく思はれます。そんなわけですから、俳句に妖怪を詠まれることも、さう多くはなかつたやうです。從つて芭蕉の句にも、妖怪を取扱つたものが極く僅かであると云はねばなりません」

客「併し一般の風潮にかゝはらず、芭蕉自身が妖怪に特別關心を持つてゐたならば、どしどし句を作れた筈ではなかつたでせうか」

主人「あなたの見方のやうに、芭蕉が殊更さういふ方面に、趣味を缺いてゐたといふことも出來ませう。芭蕉にして、想像力がないなどとは云はれませんからね。芭蕉の句には、確かに妖怪を相手として詠んだ句は無いかもしれません。これは妖怪といふ句ではありませんが、狐を詠み入れた句には

畦止亭におゐて即興、月下逕兒

月澄や狐こはがる兒の供
闇の夜きつねヶ下はふ玉眞桑

などがあり、髑髏といふ文字を用ひた句には

菖蒲生けり去年の鬷の髑髏

の句がありますけれども、これは妖怪にはちつとも關係のない句であります。然るに蕪村になりますと、芭蕉とは全く相反して、物凄いほど多く妖怪の句があります。それのみならず、妖怪を取扱つた隨筆其他小文が澤山あります。こゝに芭蕉と蕪村の比較參考までに、蕪村の妖怪の句を若干申上げてみませう。

公達に狐化たり宵の春

秋のくれ佛に化る狸かな

鬼老て河原の院の月に泣く

化さうな傘かす寺の時雨かな

狐火や髑髏に雨のたまる夜に

これはほんの一部分に過ぎません。何故蕪村はかうした方面に關する作が多かつたかといへば、現實逃避的な時代風潮から、眞直に脚下の藝術道を掘り下げる努力を注がないで、安易なる横の藝道卽ち妖怪趣味、支那趣味へと流れたゝめであります。それには蕪村が畫家であつたといふことも、相當大きな影響を及ぼしてゐるやうであります。ところで私は蕪村の講釋ばかりをしてゐるやうでありますが、蕪村のことはこのくらゐで止めませう」

客「芭蕉と妖怪ですから、可成面白くなりはしないかと思つてゐましたが、案外つまりませんですね」

主人「大體かういふ題を選ぶことが、無理ぢやありませんか。さてさて眠氣ざましに、一つ面白い芭蕉の妖怪談を致しませう。

或年の七月四日のことです。芭蕉が中國を行脚して、肥後から筑前に至り、元崎村から八里先なる、秋月の城下に向ふとしたとき、宿の亭主が云ふには、『秋月より一里こなたに小佐川といふ川あり、其の川に土橋かゝりて通行をなすなり、然る所去年中より夜に入れば、其の川上より疲れ果てたる男出で、土橋の上にたゞずみ、川下の方を遙かに見て、名殘惜しげに悲しみ呼ぶこと毎夜なり、是を聞き、物おじ恐れずといふことなし』と。

これを聞いた芭蕉は『我古人には及ばねども、我も定家の道をしたひ、俳道發句の道に通じたれば、萬一變化の爲めに怪しき事もあらば、秀句をもつてこれをさとさん』と云つて、亭主を途中までの道案内にして、小佐川へ來ました。やがて暮六つと思はれますころ、案にたがはず川上の芦の中から、青色の火玉が立ち昇り、土橋の上へ來てポッと消えました。とみるまに、青ざめた一人の男があらはれ、川下へ手をさしのべるやうにして『お蝶お蝶、何とてこゝへは來らぬぞや、早く此處へ來る

べし』と呼び始めました。見てゐても、ぞつとするほど薄氣味が悪いのです。これを見てゐた芭蕉は何のことだか薩張りわかりません。そのうちに川下から突然『われは其處に行きたき事山々なれども前世の罪科執念の空となり、中をさへぎり、其處へ行く事態はず、あらなつかしさ、なつかしさ』と女の聲がします。

この時芭蕉は驚く樣子もなく、その男に向つて、何故こゝに現はれて、そんなに女を呼ぶのか、と尋ねました。その男は芭蕉をしげしげ見てゐましたが、俄かに打ちしほれ、身の上話を語り始めました。それによると、その男は秋月城下の町人で、名を多吉といひ、若氣のいたづらから、人妻と密通し、二世懸けての約束までしたところ、相手の男卽ち前夫から怨まれ、やがてお仕置として、自分は川上へ、女は川下へ連れてゆかられて、殺されたのださうです。そこで毎夜戀しさに堪へられず、二人で逢ひたいと思ふけれども、苦しさが一と通りでなく、どうしても浮かばれないのです、と云ひました。

これを聞き終つてから、芭蕉は二人の前世の罪をさとし、『人間の性は空より來て空に歸る、其故に仇もなく、恨もなく、愛もなく、泰もなく、すみやかに念をひるがへし、本來の空に歸るべし、我數年功を積みし俳句の敎化にて、再び汝が執念を女の執念に合集なさしめん』といひ、そして高らかに、

川上と此の川下や月の友

と吟じましたところ、その男は見るまに一つの青い火魂となり、これに川下よりも、亦青い火魂が飛んで來て、二つの火玉はもつれもつれたまゝ、忽ち西の空へ飛んで行つてしまつた、といふことであります。芭蕉が俳句を作つて、道ならぬ情死の魂を浮かばせてやつたとは、甚だ信じられぬことであり、又『川上と』の句にしても、そんな場所で作られものではありませんが、面白い話だからと思つて申上げました」

客「本當でないのか、誰が作つたのかしりませんが、なかなか興味のある話であります。こんな話はまだ他にもありませうか」

主人「それでは又申上げませう。

芭蕉が尾州美濃路にかゝり、倉元山の麓を通つたのは、秋も半ばでありました。山中の木といふ木は紅葉してゐますが、吹き來る風は殊に寒く、身にしみじみとこたへます。芭蕉一人寂莫たる山道を辿りゆくほどに、日は西山に傾きかけました。そのときです、不思議なことに、遙か向ふの谷底に、汗馬の音がかまびすしく太刀打してゐるらしい音が聞えました。こゝは倉元山の半ばであり、人の住む所ではないのです。しかもかうした泰平の御代に、汗馬の音が聞えるとは、甚だ以て解せないことで

あります。これはまさしく狐狸の變化に違ひない、話の種にもなることだから、一つ正體を見屆けてやらうと思ひ、山傳ひに半町程歩いて、その谷底へ下りました。さうしたところ、徒に草木が茂つてゐるだけで、これ以上行くべき道とて見つかりません。

芭蕉は詮方なく、岩角に腰を打懸けて、谷底を眺めてゐました。やがて汗馬の音は鎭まりましたが、と突然二三間前に、一人の武者が現はれました。武者は緋おどしの鎧を着け、鹿の角で鍬方打つた甲をかぶり、黄金作りの太刀を帶び、手に一本の矢を携へてゐます。面喰つた芭蕉は氣を落着けてから、武者に向つてかう云ひました。『今は天下泰平の御代であり、又この山中には人など住んでゐない筈である、それにもかゝはらず貴殿が甲冑を着けて、こゝに居るとは甚だ不思議なことである、一體貴殿は誰方ですか』と。

武者は芭蕉の言葉を聞いて素直な面持になり、涙をはらはらと流して答へました。

『我れ翁を見まするに、俳道に心を寄せられて、怒患邪横に心を向けて居られない。これ寔に佛法法力の手綱といふもので御座いませう。それ故に我れは、翁が此處へ來られるのを待つて、顯はれたのであります。我れは何を包みかくしませう、其昔元暦年中朝日將軍義仲にかしづいて、粟津ケ原にて討死したる今井四郎兼平の亡魂であります。我れは忠勤に命を捨てたのではありますが、戰場にて多

くの人殺をした報ひでせうか、修羅の苦患やる方なく、浮かぶことが出來ません。何卒翁の教訓を得て、佛果の種といたし度く存じます。それからもう一つお願ひが御座います。この矢の根、これは木曾源氏に於て澤上の矢の根と申すもので、十本の矢の根であります。澤上といふ人は、天智天皇が未だ御即位遊ばされぬうち、木丸殿と申す所に御出でになり、そこに於て、朝敵追討のため特に澤上速に申付られ、矢の根を十本打たせられたのであります。此時澤上が申上げますには、この矢は敵に放つことなく、陣中の寶として置けば、必ず敵が亡びるとのことであります。從つて天皇は陣中の守護神として保存されましたが、其後故あつて木曾源氏に傳はりました。然るに木曾沒落の時、この矢の根を一本失ふたのであります。これは不凶のことゝ思ひましたが、その通りで義仲は粟津ケ原で討死され、士卒一同は散々となつたわけであります。主君義仲は粟津の一ケ寺へ葬り、義仲寺と申します。且つ又右の矢の根九本は義仲寺へ納めましたが、一本が不足してゐます。私は黄泉にゐて深く嘆き、漸くにこの矢の根をたづね求めましたから、どうか義仲寺へ納めて頂きたいのです。足下は四五日のうちに、義仲寺の邊を通られるやうですから、このことを吳々もお願ひいたします』と云つて矢の根を芭蕉の前に差出し、芭蕉に問ふて道一和の教訓を受け、更に『足下が若し義仲寺へ參られたら何卒我れの佛果をもとひくれるやう、住職に御傳ひ下さい』と云ひ足しましたから、芭蕉は一々承知

しました、と答へました。ところが武者の姿は忽ちに消えて、秋風の中の草木となつてしまひました。併し矢の根だけは残つてゐます。芭蕉はこゝに追善の一句

もの いへば 唇 寒し 秋の風

と吟じ、四五日後に近江へ入り、義仲寺の住職にしかじかのことを話しました。芭蕉の遺言で、義仲寺とうしろあはせに葬つたのも、以上のやうなわけであると、世人が語り傳へてゐると申します。これも眞僞のほどは保證出來ませんから、その積りで聞き流して下さい」

客「或ひは小説風に傳へられたものかしれませんが、芭蕉に關する事柄と、實に調子よく結びつけてゐますので、聞いてゐても、なかなか興味が乘つて來ます。もつと他にもありますか」

主人「それでは又他のものをお話しませう。

芭蕉が久留米城下を立ち出て、古馬ケ原といふ野邊にさしかゝりました。こゝは人里遠く離れ、草がぼうぼうと生え茂つてゐますために、日晝でさへ通行する人がないくらゐです。芭蕉は自分の後ろから、誰かついてくるやうな氣配がしたので、振り返つて見ました。すると年の頃九ツ位の美しい女の子が、手に何か持つてゐるやうでしたが、芭蕉を見て『おじさま』と呼びました。こんな物騒な野原に、幼ない子供が只一人で來るわけはない、これはきつと狐狸の類ひであり、自分を化かさうとし

て、呼びとめたに違ひあるまい、と芭蕉は思ひ『見れば可愛らしい女の子であるが、只一人何の爲めにこゝへ來たか、お前はまさしく狐狸の類であらう、我れにどんな用事があるのか』と問ひ返しました。すると女の子は、私は決して左樣な狐狸の類ではありません、おじさまへ頼みたいことがあるのです、私の父は此先の三谷村と申すところの本左衞門であり、母も御座います。どうぞこの鞠を母樣へ屆けて下さいといつて、糸で美しくくゝりつけた鞠を、芭蕉に渡しました。芭蕉はそれを受取り、成程左樣ならば、此の品を母へ渡してあげよう。併し未だ幼いお前が父母のもとに居らず、このおじさまに頼むとは、少しおかしいではないか、一體お前は何處に住んでゐるのか、と聞きました。女の子はためらひもせず、この先を少し行つたところが、私の宿であります、と答へました。芭蕉は愈ゝ合點が行かず、狐狸に違ひないが、それにしても住所をつきとめてやらうと思ひ、女の子に從つて行きました。道すがら芭蕉は女の子に向つて、お前は此處に貰はれて來たのか、と尋ねましたら、いやさうではありませんと答へるのです。程なく叢茂つた所へ來ましたら、女の子は立ち止まり、こゝが私の住家であります、おぢさま、おさらば、おさらば、何卒鞠を母樣へ渡して下さい、と云ひ終らぬうちに、その姿が消えてしまひました。

芭蕉は、奇異なこともあるものだと一時呆然としましたが、この鞠が殘つてゐるのだから、これを

屆けようとして、三谷村へ入りました。芭蕉は女の子から聞いた、本左衞門といふ名の人が居るかどうか、村人に問ひましたところ、それは苗字を戸塚部と申し、當所にても有德な百姓であると云はれ早速に見付け出すことが出來ました。芭蕉が案内を乞ふて家に入ると、百萬遍の聲が聞えます。亭主夫婦は見慣れぬ旅人とは思つたが、對面したいと云はれるゝに、芭蕉を座敷へ招き入れました。こゝに於て芭蕉は、女の子の樣子やら、依賴されたことなどをこまごまと語り、鞠を母なる女へ渡しました。すると女房は鞠を繰返し見てゐましたが、わつと泣き出しました。夫の本左衞門も側へ寄り鞠をしげしげと見てゐましたが、直ちに涙に暮れてしまひました。それからやゝ暫くして、夫婦は芭蕉に向つて、次のやうに申しました。その八九歲の女の子は、我娘の亡靈であります、その娘は私共にたつた一人の娘で、親からこんなことを云つてはおかしいですが、他人に優れた利怜な子でした、併しどういふ前世の因果でせうか、先月上旬夫婦が娘を連れて、この先の野邊へ遊びに出かけました、その時娘はこの鞠を持つて面白く遊び戯れてゐましたが、小馬の樣な狼が何處からともなく飛んで來て、娘をくわへたまゝ逃げて行つてしまひました、あの時泣き叫んだ娘の聲が、未だに聞えるやうであります、それからといふものは、四方八方手を盡して探してみましたが、見つかりません、毎日歎き悲しんでをります。今日は丁度娘の命日に當りますので、御覽のやうに百萬遍の供養をしてゐると

ころであります。こゝへ娘が旅人へ托して、鞠を屆けたといふことは、娘の死骸が野邊に晒してある故、早く葬つてくれとの賴みで御座いませう。旅人さん、どうか娘の爲めに一ぺんの念佛を手向けて下さい。明日は早く出かけて、娘の白骨を拾つて參ります、と。

芭蕉はその夜この話を聞いて共に涙に暮れ、翌日芭蕉も同道、古馬ケ原に出かけて、娘の消えたところ、卽ち娘が住家であると云つたところを探して見ました。あるわあるわ、狼に喰荒ひされた骸骨が散つてゐます。一同はこれを拾つて菩提所へ葬り、『車敎智せん童女』の法號を貰ひましたとか。芭蕉は追福の一句

かつこ鳥板べの背戸の一里塚

を手向けたさうです。これが九州筑後古馬ケ原一里塚の由緒である、といひ傳へられてゐます」

客「愈ゝ興ありて愈ゝ妙、といふやうな話であります。芭蕉にも捨てがたい話がこぼれてゐるものですね。或ひは後人の僞作にせよ、堂に入つた味を出してゐるではありませんか」

主人「もう一つ怪談を申上げて、それで切り上げることにしませう。

或年の正月十一日、芭蕉は淺草觀音へ參詣の序に、隅田川梅若の墓へ詣でようとして、川岸の通りを歩いてゐました。さうすると右手の柳の下に、十三四才位の童が小聲で念佛を唱へてゐます。こん

な邊鄙なところへ童が來るとはおかしい、そしてえらい六ケ敷い念佛を唱へてゐるのが不思議だ、と芭蕉は童の側へ寄り、どういふわけであるかを問ひました。童が云ふには、日本は神國であるが、佛法も盛んである、それ故に私のやうな童迄、佛法の功力を得てゐるわけです、これといふのも金龍山觀音が近くにあるためです、その次にはこの木母寺に大念佛の供養がありますため、私は西方淨土へ行つてゐるにも拘らず、數百年を經た今日、この有難さを忘れることが出來ず、時折姿をあらはし、淺草觀音並びに木母寺の方を伏し拜むのであります、と云ひ終ると直ちに姿を消してしまひました。芭蕉は奇異な感じを抱き、どうみても人間ではなかつたやうだ、恐らくは化物かもしれない、と考へたがあの童の言葉から、又數百年佛法方便などといふところから考へて、あの童は此の川岸で獵人の爲めに殺された、梅若の亡靈ではなかつたか。さうすると一入あはれを催して、芭蕉は靜かに南無阿彌陀佛と回向をなし、木母寺に參りました。寺は一人の參詣人もなくてひつそり閑としてゐます。ただ本堂から聞える大念佛の聲だけが耳に入ります。先づ梅若の塚へ、と詣でゝみましたところ、ほんの印に植ゑられた柳が淋しく殘つてゐます。芭蕉はこゝで

さしかけにしても柳は亂髮

と吟じて、木母寺の本堂の方へ來ました。其處に恰度一人の出家が立つてゐましたから、芭蕉は先刻

柳の下で出逢つた怪しい童のことを語り、僧に尋ねてみました。すると僧はさも承知といふやうに、それは間違ひもなく梅若の亡靈であり、今日のやうに雨天か、又は曇り日には必ずあらはれて、この隅田川の邊を歩くのです、勿論念佛を唱へながら歩くのです、と敎たへさうです」

七部集問答

客「所謂俳諧七部集なる冬之日、春之日、曠野、比左古、猿蓑、炭俵、續猿蓑を通して、その藝術價値を批判していたゞきたいのであります」

主人「それはわけないやうですが、蕉風そのものが連句に主力を向けられてありますため、具さに連句を考究しなければ、容易に芭蕉の藝風を窺ふことが出來ません。さはさりながら、この場合はさうした餘裕を持合せてゐませんから、發句を、その發句も二三をかいつまんで、比較研究することにとどめませうか。それでよろしければお話いたしませう」

客「連句は聞いてもなかなか六ケ敷いさうですし、又さう時間とてもありませんから、恰度幸ひといひませうか、發句だけに就いてお願ひいたします」

主人「實はこの點私としても、甚だ意に滿たぬところではありますが、連句になりますと大變ですからね。三日や四日では迚も濟みさうもありませんから、發句だけにいたしませう。それでも現代の俳人には、多少稗益するところがあるかもしれません。

『冬の日』は芭蕉が四十一歳のとき、卽ち貞享元年の冬、甲子吟行の旅中、名古屋で出來た尾張五歌仙に、追加の表六句を收められた冊子であります。この冬の日の特色を簡單に云ひますと、旅中の芭蕉でありましたゝめに、すべての俗念を離れ、たゞあるものは全心俳諧でありましたから、非常に澄み切つた境地を見せてゐます。しかも壯年の芭蕉故に、俳諧全體に非常な强さを加へ、そのために驚くべきほどの迫力をさへ具へてをります。それから年輩が年輩でありますためか、嫌に取りすました態度が見られず、從つて縱橫無盡、自分の藝術意慾の赴くまゝに、取り運んでゐるといふ良さを示してゐます。われわれは冬の日を讀んで、今更のやうに芭蕉の多角形的な藝風、時には淡々として墨繪の筆の走るがまゝにといつたやうな、時には洋畫にも似たる濃厚なる色彩及び感覺に接して、當惑することさへもあります。唯惜しいことに、晦澁と思はれる作のありますのは、談林調から未だ脫却しないためでありませうか。それとも師としての用意周到なる心遣ひから却つて技巧を增したゝめでありませうか。もつと詳しく言はうとしますと、つひ五卷の歌仙に言及しなければならぬことになりま

すが、もともと私は發句に就いてだけ語る筈でしたから、連句の一々に關しては觸れないことにしませう」

客「私はこれから先生の御說を頭に置いて、冬の日をゆつくり讀み味つてみたいと思つてゐます。芭蕉の最初の撰集であるだけに、敎へられるところも澤山御座いませうから。それでは冬の日の發句だけに就いて、何彼と御批評を仰ぎたいのであります」

主人「そんなわけで芭蕉の發句に移るつもりですが、冬の日は尾張五歌仙を以て埋めてありますから發句がないのです。そこで第一卷の歌仙なる芭蕉の發句に就いて、少しばかり述べてみませう。

笠は長途の雨にほころび紙衣は泊々の嵐にもめたり佗つくしたるわび人我さへあはれに覺えけるむかし狂歌の才士此國にたどりし事をふと思出て申侍る

狂句木がらしの身は竹齋に似たる哉　芭蕉

この句は前書によつて知られる通り、木枯しに吹かれて佗びつくしたる我身は、狂歌よみの竹齋にも似たやうなもので、發句らしい發句を詠むであらうよ、と謙退した芭蕉の心持を含めてあるらしいのです。この句は奇調といふほどではありませんが、矢張字餘りで、談林風の臭味を多分に殘してゐます。但し內容的には談林風よりは非常に飛躍し、更に貞德風にも見出されぬ獨自の境

を歩いてゐます。この點漸く芭蕉らしい風調を帶びかゝつて來たもの、と見ることが出來ませう」

客「さうですか、發句集でなくて、連句集ですから無理もありません。併し私は御說によつて、芭蕉初期の俳風を見る上に、ある暗示を得ましたので、非常にうれしく思つてゐます。次には『春之日』をお願ひいたします」

主人「春の日は翌貞享二年卽ち芭蕉四十二歲の春にかゝり、その次の年なる三年の秋に上梓されたものであります。この集を瞥見しますと、冬の日そのまゝの風調も偲ばれますが、概して趣向が高く、淸く、その香りも一段と鮮かになり、且つしつくりと落着いてきたやうにも見うけられます。それも蕉門中卓越した俳人である野水、越人、荷兮等が加はつてゐるのですから、成程と思はれないでもありません。芭蕉の句は次の三句が入つてゐます。

古池や蛙とびこむ水のおと　芭蕉

雲折々人をやすむる月夜哉　同

馬をさへながむる雪のあした哉　同

この時期には芭蕉も全く古臭を脫して、明かに自己の俳境卽ち蕉風を形づくつてきたのであります。支考は『葛之松原』にて

芭蕉庵の叟一日嗜焉として憂ふ、曰く風雅の世に行はれたる、例へば片雲の風に臨めるが如し、一回は皂狗となり一回は白衣となり共にとゞまる所を知らず、必ず中間の一理ある可し、とて、春を武江の北に閉ぢ給へば、雨靜かにして鳩の聲ふかく、風柔かにして花の落つる事遲し、彌生も名殘惜しき頃にや有りけん、蛙の水に落つる音屢々ならねば、言外の風情此一筋にうかびて、蛙飛び込む水の音、といへる七五は得給へりけり、晉子が傍に侍りて、山吹と云ふ五文字を冠ぶらしめんか、とおよづけ侍るに、只古池とは定まりぬ、しばらく是を論ずるに、山吹といふ文字は風流にして花やかなれど、古池と云ふ五文字は質素にして實也、實は古今の貫道ならし、されど花實の二は其時に臨める物ならで、柿本人丸のひとりかもねん、と詠める歌は斯計りにてやみんも拙し、定家卿も此筋にあそび給ふとは聞侍りし也、然るを山吹のうれしき五文字をすてゝ、只古池となし給へる心こそ淺からぬ、頓阿法師は風月の情に過ぎたりとて、兼好淨辨の諫め給へるとかや、誠に殊勝の友也、

と云つてゐます。參考として聞くにはおもしろいが、支考の誇張故に、耳を傾けて絕讃することは出來ますまい。この句が天下一の名句のやうに云はれるに至つたのは、支考の宣傳もありませうが、小築庵といふ人が『古池眞傳』を上梓して、かついだことが與つて力あつたものと思はれます。たゞ芭蕉の句として公平に見たら、良くもない句、拙くもない句で、閑寂の境を詠んだまでのことでありませう。但し再び云ひますが、昨年の冬の日よりは一段と進境を辿つた句である、といふことが出來ます」

客「人が有名になるにも、その裏面にはいろいろのことがありませうが、俳句であつても、一句が有名になるにはその裏面にいろいろのことがあるものですね。芭蕉が四十二歳といひますと、最も油の乗つた時期でせうか」

主人「嫌やさうではありません。芭蕉はもう少し後のやうです。私もこゝが一寸おかしいと思つてゐます。普通ならば早老性の芭蕉ですから、もつと早く圓熟期が來てもよいのですが、芭蕉はさうでないのです。一概に落着かなかつたであらうとか、雜念が遲くまであつたであらうなどと云つて、簡單に片付けるわけにも行かないやうです。健康狀態と精神との調和なども大いに影響してゐるでせうし、又周圍の事情、あながち家庭のことばかりでなく、門人などとの呼吸、といつたやうなものもなかなか大きな影響を與へてゐるものと思はれます」

客「次には『曠野』に就いて、お話願ひます」

主人「曠野は芭蕉四十六歳の折、卽ち元祿二年の三月に編まれたものであります。この選集は實に雜然としてゐて、何處に編纂の中心を置いてあるかわかりません。强いて見出すとすれば、蕉風の大を誇つてゐるやうなところでありませう。たゞ芭蕉の吉野行脚の句が嚴然と腰を据えてゐますので、讀むに値するやうなものではありますまいか。扨て芭蕉の句は澤山入つてゐますが。そのうちで

いざ行かん雪見にころぶ處まで　芭蕉
二日にもぬかりはせじな花の春　同
ほろほろと山吹ちるか瀧のおと　同
かれ枝に烏のとまりけり秋のくれ　同
から崎の松は花よりおぼろにて　同
ひとつ脫てうしろにおひぬ更衣　同
父母のしきりに戀し雉子の聲　同

などの佳吟を擧げることが出來ませう。この頃も尙ほ俳諧の良さといふやうなものに、押され氣味なところがないではありませんが、漸く作意が少くなつたといふこと、云はゞ對象と同化して其處に素直に自分が居る、といふやうな境地に辿りついてたではなからうかと思はれます。昔から旅人芭蕉とも云はれますやうに、旅卽芭蕉、芭蕉卽旅、さうして旅と芭蕉とが一體にならんとするときのあたゝかさ、そんな風なときに生れるであらう、詩人的な香氣が顏を出しかけてゐます。勿論こゝが他人の追從を許さぬ芭蕉の風格として、伸びゆくところでありませう。右の句は皆芭蕉の名吟と云はれてゐるやうですが、これをもう少し深く觀察してみますと、さうは云ひないものがあります。私は曠野の

中の句を見ても、未だ句を弄んでゐる心がありはしないかと思ふのであります。しかも『いざ行かん』の句にしても、また『二日にも』の句しても、意識的に戯謔を加へてゐるやうであります。それから『かれ枝に』は原句が『とまりけり』ではなくして『とまりたるや』であつたのですから、これ又多分に戯謔を含んだ句であります。かうしてみると、芭蕉は未だ圓熟の境地、老熟の境地にまで到達してはゐないのだといふことが出來ませう。但し春の日に較べてみると、驚くほどに句が落着いてきたといはねばなりません」

客「四十六歳にもなつて、まだそんな氣持でせうか。それは未熟といふものでなく、先達て御話のやうに、芭蕉にさうした氣持が多分にあつたから、わざとさうした趣向を狙つて作つたものではないでせうか」

主人「さうです、私も多少はそのやうに觀察してゐます。併し蕉風が、世に一般に云はれてゐるやうな、寂栞などの境地からみると、いさゝか浮はついてゐる句、まあ大芭蕉からみると、未熟といつてもよいではないかと思ふのです」

客「次には『比左古』へ進んでいたゞきませう」

主人「比左古は翌元祿三年六月の出板であります。つまり芭蕉が四十七歳のときに出來たのであります。これには連句のみを五卷收めてあります。この編輯者は近江瀨田の診碩（洒堂又は洒落堂ともいひます）で、珍碩、曲水、乙州、正秀、路通、越人、荷兮等の錚々たる顔ぶれでありますから、入神の付句とも申されるやう、餘裕綽々として運んでゐます。所謂他派の臭味を完全に離脱したるもので、蕉風の代表的連句と稱しても差支ないでせう」

客「これも連句だけですか。それではこれをとばして、次に移つて貰ふとしませう」

主人「いや、翁の發句がありますから、それに就いて一寸申上げませう。

木のもとに汁も鱠も櫻かな　芭蕉

この句は西行の『木のもとに旅寐をすれば吉野山花の衾をきする春風』、花山院の『木の下を住家とすればおのづから花見る人となりにけるかな』、貫之の『さくら散る木の下風は寒からで空に知られぬ雪ぞ降りける』などの趣向をふまへてあるのでせうか。汁も鱠もその他も萬物みな櫻であるといふところ、師翁が『花見の句かゝりを少し得て輕みをしたり』と云つてゐます通り、圓滑平明の境を得て妙なるものがあるといふべきでありませう。この點蹟野からみると、殊更らしい飾りも取れ、わざとらしくない輕みが附いて來たといふことが出來ませう」

客「前よりもずつと進歩したとのお話ですが、この一句ちやどうにもわかりませんです、矢張連句を

讀まなければならぬ、といふわけになるのでせう」

主人「そんなことをしないで、芭蕉の俳句を年代順に、幾らかづゝ比較研究されたならば、直ぐに進歩の過程を明瞭に見屆けることが出來ませう」

客「さうですね、さうしてみませう。それでは次に『猿簑』に就いて御話を願ひます」

主人「猿簑は芭蕉が四十八歳のとき、卽ち元祿四年の選集であり、この撰者には去來と凡兆が當つてゐます。實に猿簑は撰者が名人であつたからといふばかりでなく、芭蕉最高潮の傑作、『奥の細道』中の名句が殆んど入つてゐますところから、蕉風第一の選集として、永久に光りを放つものであります。例へば

初時雨猿も小簑を欲しげ也　芭蕉
住つかぬ旅のこゝろや置炬燵　同
人に家を買はせて我は年忘　同
うき我をさびしがらせよかんこ鳥　同
夏草や兵共が夢のあと　同
風流のはしめや奥の田植うた　同

頓て死ぬけしきはみえず蟬の聲　同
草臥て宿かる頃や藤の花　同
行春を近江の人とをしみける　同
先たのむ椎の木もあり夏木立　同

かう僅かの作を拾ひ出してみてもわかりますやうに、何と透徹した主觀ではありませんか。詩人芭蕉が最も圓熟完成したる時代は何時かと問はれたら、この時代でありますと、躊躇せずに明言してよろしいと思ひます。芭蕉はどちらかといふと、客觀句を好まないやうですが、今申上げた句を讀めば誰しも讃嘆して止まぬやうに、主觀客觀混合に洗練を極めたる句、否客觀も主觀も超越して、文字を、構想を、不思議なくらゐに使ひこなしてゐます。謂はゞ芭蕉その人が、藝術的に溫雅沈靜の妙境に到達したからこそ、かゝる名什が口をついて生れ出たのであります。この猿簑中の芭蕉の句をして、假りに冬の日や春の日などと比較してみようものなら、俳境の深遠に於ては、全く別人の如き感がいたします」

客「そんなに褒めなければならぬでせうか」

主人「何しろ、撰者が學問に造詣のある去來と、天才と云はれる凡兆でありますからね。そればかり

の原因ではなく、先にも申上げましたやうに、奥之細道の佳吟が全巻に盛られてあるわけですから、七部集の第一位を占むる撰集であります」

客「併し未だ人生的に深くなり、句が落着き、寂びてもくるといふことはありませんか」

主人「それは考へられますが、芭蕉は短命でしたから、この邊が最高峰の藝術であつた、と見られるのです。これは次の撰集によつてよくわかります」

客「次に『炭俵』を論じていたゞきませう」

主人「炭俵は元祿七年の夏に出來たものです。芭蕉はこの年の十月に、五十一歳を以て歿してゐます。この選集に於ける芭蕉の句は晩年のせいもありませうが、非常に力が抜けてゐます。老境に入ると、かくも平淡になるのかと思はれるほど、魅力迫力のない句が多いのです。これを別な見方からいへば、藝術的努力を離れて、句が靜かになり、句が枯れ、句が輕くなつてきたとでもいひませうか。それにしても句そのものに、高らかなる境地、清く澄んだ境地等の見出されないのは、何としても遺憾であります」

客「死ぬまで旅をつゞけ、句作をつゞけてゐました芭蕉でありますのに、たゞ老年だつたからと、ただそれだけで片付けることが出來ませうか。何か他に原因らしいものがないでせうか」

主人「その原因は勿論芭蕉の老年といふことにもありますが、炭俵全般として、句の落ちてゐることは、編者なる野坡、孤屋、利牛等の凡才が多分に影響したものでせう。それ故に炭俵の價値の低きことを責めるとしたならば、芭蕉よりも、この編者等がその責の大半を負はねばならぬと思ひます。

芭蕉の句は

傘に押しわけ見たる柳かな　芭蕉
青柳の泥にしだるゝ汐干哉　同
春雨や蜂の巣傳ふ屋根の漏　同
卯の花やくらき柳の及びこし　同
駿河路や花橘も茶の匂ひ　同
煤はきは己が棚つる大工かな　同
鞍壺に小坊主乘るや大根引　同
朝かほや畫は錠おろす門の垣　同
木かくれて茶摘も聞や郭公　同
うぐひすや竹の子藪に老を鳴　同

の如き句ばかりで、目にふるゝ景色に輕い氣分を加味して、造作なく作り上げてをります。孰れも觀察に、又表現に鋭い力といふものが働いてません。一寸見ると、よい加減に句をあしらつてゐる、といひないでもありません。猿簑に於ける大芭蕉の勢ひは何處へやら、と惜しまれてなりませんが、卑俗好みの野坡・孤屋・利牛等が師の句から、殊更に低趣味なもの、自分等の好きなものを拾ひ出したとも云はれませうし、又蕉門に熱心であつた野坡・孤屋・利牛のために、芭蕉がひきづられて、段々と低調な句を作るやうになつたとも云はれませう。しかも老境の芭蕉ですから、藝道に一段と力のぬけたことは止むを得ないでせう。最後に私は、芭蕉のために云ふのではありませんが、猿簑に於て完全に蕉風が樹立されたゝめ、非常に安神したところから、不知不識に熱と力が薄らいだものであるといふことも、決して云ひないことではないだらうと思ひます」

客「一々首肯するばかりであります。あゝもかうもと四方八方からの御觀察、聞いて居りまして成程と思ふだけで、これ以上私が突込んで聞く餘地は御座いません。この次は最後の『續猿簑』に就いて簡單に伺ひたいものと思ひます」

主人「續猿簑は芭蕉の歿前、郷里伊賀で興行された歌仙を主として、歿後に編まれたものでありますが、これはまごうかたなく、支考僞撰の書であります。從つて支考に都合に都合のよいやうな、連句

と發句とが採錄されてゐます。併し集中、支考が師芭蕉に遠く及ばないことはいふまでもありません。但し芭蕉の連句・發句は佳作であるにせよ、以前の猿簑から見ると、いさゝか氣魄が落ちかゝつてゐます。採錄されてゐる芭蕉の發句は、次のやうなものであります。

春もやゝ氣色とゝのふ月と梅　芭蕉
鶯や柳のうしろ藪のまへ　同
朝露によごれて涼し瓜の土　同
さみだれや蠶煩ふ桑の畑　同
名月にふもとの霧や田のくもり　同
川上とこの川しもや月の友　同
十六夜はわづかに闇のはじめ哉　同
老の名の有ともしらで四十雀　同
稲妻や闇の方行五位の聲　同
まつ茸やしらぬ木の葉のへばりつく　同

これを見ますと、流石支考が撰したと思はれるだけに、藝術的素質の乏しい商人野坡・孤屋・利牛の

撰した、炭俵中に採錄してある芭蕉の句よりは、遙かに佳き句を採つてゐます。けれどもこれを圓熟の頂點を示したる猿簑中の句に比較しますと、問題にならぬ程低下してゐます。たゞ晩年の作でありますだけに、熟し過ぎて平明淡々の境地に辿り着いたもの、漸くにして枯淡の境地に達したものであると、讃稱する人があつたとしますれば、それは餘りにも同情的な推察であるといはねばなりますまい。主觀俳人の芭蕉、かつては自分卽俳句、俳句卽自分の藝道を自由に濶步出來た芭蕉が、客觀の句をそれも平明な句を、多く作るといふやうになつた傾向は、とりもなほさず自分の藝術の衰退を裏書してゐるものといはねばならないでせう」

客「至れり盡せりの御批判を聞かせていたゞいて、寔に有難い次第であります。本日は本當のところ質問すべき多くの材料を持合せてゐないのであります。たゞ七部集は以前に一寸、それもぼんやりと目を通したことがあるくらゐ、そして誰彼から、芭蕉の七部集とは、こんな本であると、本の名を聞いたか、又は何かで見たくらゐのところであります。今後折があつたら、詳しくしらべまして、それから改めてお聞きしたいと思つて居ります。その節は又何卒よろしくお願ひいたします」

主人「承知しました。これで一と先づ芭蕉の話は打切りとなし、後日折を見て、蕪村の話を始めることにいたしませう」

（終）

著者は——名は中庸、紫舟並に黎明居と號す。明治三十七年奥州會津に生る。小學校在學中より俳句を好み、後早稲田大學附屬第一高等學院に入り、て早大俳句會を興し大學部に入りて俳句雜誌「黎明」を創刊し今日に至る。早大在學中に「戀愛俳句集」「俳句三十講」「芭蕉蕪村子規の俳言」を著はし、卒業後は新藝術俳句の唱導と研究等に沒頭し、新聞雜誌に俳句と文章を發表する傍ら、「禪之生活」「口」「國民書道」等其の他諸雜誌の選句に携はる。その間の著書に「新選俳句季語辭典（四册）」「森林」「俳人芭蕉傳」「芭蕉夜話」「感情のけむり」「俳句藝術論」「俳人蕪村全傳」等あり、希望者へ本書にサインを爲す、返送料要。

昭和十五年六月五日　印刷
昭和十五年六月十日　發行

芭蕉人間學

定價　金一圓八十錢
滿、鮮、臺等外地　定價　金一圓九十八錢

大日本出版社峯文莊

——(版權所有 57.2600)——

著作者　加藤紫舟
東京市神田區猿樂町二ノ八

發行者　志水松太郎
東京市四谷區新堀江町三

印刷者　小川義一
東京市四谷區新堀江町三

印刷所　秀文社

發行所　大日本出版社峯文莊
東京市神田區猿樂町二ノ八
振替　東京　二三一三四番
電話　神田(25)二三九三番

大賣捌
栗田書店・東京堂・東海堂
北隆館・大東館・大阪屋號
星野書店・柳原書店・盛文館
福音社・金文堂・大坪惇信堂

正木直彦序
後藤朝太郎著

茶道支那行脚

眞の支那民族心理を知る書

四六判・二三六頁　定價一圓五十錢
美裝・上製・箱入　送料十錢

新刊

茶道は人生に寄與する幽玄なる天地を茶に閉拓し又自己の清高な風を懷茶によつて培つて行かうと するのであるよつて而かも文字の上よりすれば常に喝茶の方法に據らなくてはならぬ、そこに茶道の目的が達せられる固よりこれ舌本に餘香を留めるのである。茶を煮、茶を觀ずるは、茶道の流れを汲む人生の幽玄味を指し、茶道つまり茶道とは茶を通じて生活の型を必ずしも茶道とは云ふ日本書謂ふのである。

（目次）

茶道……茶禪一味、茶席と茶器、茶の常識
闘茶、茶と世道、風格
線の太き喝茶趣味……支那の卓茶、點茶の無關心振り、芳茶を前に禪機を味ふ、茶館の喝茶
喝茶の江南……支那の喝茶、城内の茶館、茶樓、路傍の喝茶、船内支那客の喝茶、武昌黄鶴樓址の喝茶、南京中山陵下茶樓なきを惜しむ
陸羽の玉泉を尋ねて……支那の茶趣味、茶館の雲煙模湖の出入、天下第一線から第六線まで
支那庭園の幽玄味……支那庭園と文字美、支那庭園の構造と材料、支那庭園に見る時代の錆
支那庭園を尋ねて……支那庭園の理解、神祕的な幽趣、個人の支那庭園、以下略

東京市神田區猿樂町二ノ八
大日本出版社峯文莊
振替口座東京二三一三四番

市山盛雄著

恩地孝四郎裝幀

四六版・四〇〇頁
上製・美製・箱入

定價二圓三十錢
送料十四錢

新時代の廣告文學

新刊

一世の名廣告文案家ポップキンスは、一生に二千萬弗を文案制作で稼いだといふ驚異すべき事實は何を語るか。最近、日本には素晴しく廣告文學の研究熱が擡頭してゐる。世は、將に廣告宣傳時代である。あらゆる戰の優勝者たるの祕鍵は、一に宣傳技術の問題にかかるとも云へる。本書は、生きた廣告文案と標語を集積解剖を試み、新しい廣告文學の動向を指示してゐる。故に、新時代の制作のコツを會得せんとする人には、この書は百萬の味方ともなるであらう。商店經營者、企業家、廣告制作者、會社員、商店員諸氏の參考書としてこれこそ座右必備の寶典である。

（要大の容內）

緒言、廣告文學の移推、廣告文案の提唱、認識、廣告文案の求內容と制作、起源、變遷、廣告文案の表形式、訴求變遷、實際訴求表現、文案の效果要點、冠附標語、文案の意義と效果、標語の實例、類別、類例、標語と假名、短語、遣語、活用、正字、新聞紙、廣告文案の稱題、文案內容、廣告文案の構成、宣傳文案、傳利用、利用名表、出版文案、組版校正、總索引

東京市神田區猿樂町二ノ八
大日本出版社峯文莊
振替口座東京二三一三四番

松本清著

菊判・二一〇頁
上製・箱入

定價二圓三十錢
送料十四錢

日本倉庫史

新刊

倉庫の發達沿革に關しては從來多くの貴重な文獻が發表されてゐるが其の數の多い反面に採るべきものはない。其處で著者は嚴密なる考證を加へつゝ一の體系を備へた倉庫史を此處に完成したのである。

（略目次）

上古期の「くら」、熊野村の倉、齋藏、神庫、神府、寶府、府庫、氷室、屯倉、田莊、兵庫、交易館庫、中古及近古期の「くら」、大寶律令の撰修、正倉、義倉、常平倉、穀倉院、莊倉、土倉、土一揆、鴻臚館、德川時代の「くら」、常平倉、義倉、圍米、城詰米、鄕倉、米券倉庫、出羽庄內藩倉、江州大津の倉庫、江戸の倉庫、大阪の倉庫、日田の倉庫、商用倉庫、營業倉庫の起源、明治維新後の「くら」、三倉制度、鄕倉、米券倉庫、藏屋敷、農業倉庫、營業倉庫、創業期、日清戰役以後、日露戰役以後、歐洲大戰以後、關東大震災と倉庫、關西風水害と倉庫、日本倉庫協會、倉庫業法の沿革、日本倉庫業法の沿革、倉庫證券法規の沿革、倉庫法の變遷、倉庫保稅倉庫、保稅倉庫、倉庫營業、倉庫貿易施設、倉庫保稅倉庫、倉庫省

東京市神田區猿樂町二ノ八
大日本出版社峯文莊
振替口座東京二三一三四番

志水松太郎著

出版事業とその仕事の仕方

四六判・三九〇頁
挿畫多數入
上製・箱入

定價一圓八十錢
送料十四錢

多年出版の仕事に從事する著者が體驗の一切をブチマケて祕傳ともすべき急所々々を微に入り細を穿つて公開した點は類書に見られぬものがある。多少なりとも出版の道に關した仕事をする人々には絶好の參考書である。

〜〜〜〜（次目略）〜〜〜〜

【仕事】出版の心得、著者豫算と見積、紙型とその智識、事務諸手續と算定、價格とその出來取次上出、【引】本に紹介、贈與と賣行、委託、賣金と讀者割合、定法、半分入讀の製本と起方、法、販賣合賣れの印刷と、設せとは何か、人の理一化、動一致のばし雜一よとりかて、方誌考いそのら、と察のの讀小取諸、卷同例關辭賣夾經廣の智得、末人新係店店費告智識、雜本參賣へへ、雜誌と損上配決販校、記夜益數出本算賣取正、圖店出計とし、書風版算返た諸そそ保そ理、博景業上品廣方のの管のと編物絶の數告面方道と方そ輯館自對利ととへ法附法の者を費成益再その販屬方と建出立勘度の寄取賣仕用法そ

東京市神田區猿樂町二ノ八
大日本出版社・峯文莊
振替口座東京二三一三四番

903
121

W-64

終

FK2N-47

D.S.H